東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

――１９９０年度――

１９９１．３

財団法人　東大阪市文化財協会

例　　言

1．本書は財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪市の委託を受け、1990年度に実施した下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．従来は各工事ごとに調査報告書を刊行してきたが、今年度より年度ごとに調査の概要を公表していくものである。ただし、今年度は下水道関係の調査を当協会で4件(若江遺跡の試掘2件を含む)実施しているが、若江遺跡第45次調査についてのみ報告する。その経緯については、本書の第1章を参照されたい。

3．現場調査並びに整理調査は以下の体制によった。(1991年3月31日現在)

理事長　下村善博(東大阪市教育委員会教育長)
常務理事　塚田氏秀
常勤理事　西脇　実
事務局長　室田和彦(東大阪市教育委員会文化財課課長)
調査部長　原田　修(東大阪市教育委員会文化財課主査)
調査部員　上野節子
庶務部長　下村晴文(東大阪市教育委員会文化財課主査)
庶務部員　安藤紀子(東大阪市教育委員会文化財課)

4．本書の記述は第1章を上野利明(東大阪市教育委員会文化財課)が、調査の概要を各調査担当者がおこなった。調査担当者は下記の2名である。なお、本書の編集は金村が行った。

若江遺跡第45－1次調査　金村浩一
若江遺跡第45－2次調査　井上伸一

5．遺構実測の基準には国土座標第Ⅵ系を使用した。図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。なお土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。

6．遺構写真は各調査担当者が撮影し、若江遺跡第45－1次調査の遺物写真は上野利明が撮影した。また、基準点測量は国際航業株式会社に委託した。

7．調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部の御協力をえるとともに、以下の調査補助員諸氏の参加を得た(五十音順)。

小川雅人、加藤嘉隆、桑　富也、福林利彦、陸田　勝

8．本書は概要の報告であり、今後の整理途上に判明した事実などについては、来年度の概要報告や『東大阪市文化財協会ニュース』などによって発表の機会を持ちたいと思う。将来本報告書を刊行する予定であるが、それまでの調査成果の分散をご容赦願いたい。

第１章　下水道事業関係調査に至る経緯と経過

東大阪市における下水道の普及は、昭和24年の基本計画策定、事業開始をもって始まっている。その後、昭和42年には布施市、河内市、枚岡市の３市合併により、東大阪市が発足し、下水道事業も第２次５年計画の実施段階になった。この時期における下水道の普及率は、旧布施市域を中心にわずか４％強であった。また、この時期と相前後して、大阪中心部より僅かな距離にある地の利を得て、東大阪市では人口の急激な増加、および事業所等の集中化が始まった。人口、事業所等の増加は、当然ながら上下水道の完備を必要とし、また、水質汚濁防止のため、工場排水の処理が課題となり、事業計画の見直しが行われた。その結果、昭和57年には、45％の普及率となり、現在では西地区のほぼ全域、および中地区の一部が終了し、今後中地区、東地区が対象となりつつある。

工事対象地域が東に広がるにつれて、埋蔵文化財包蔵地内の工事が増加し、調査・保存について検討され、昭和40年代前半より西岩田遺跡、瓜生堂遺跡などにおいて発掘調査が実施されている。その後、若江遺跡、山賀遺跡内において下水道本管埋設に伴う発掘調査が昭和50年代中頃まで続いている。

若江遺跡第45－２次調査風景

その後、この地域では、各家庭への接続のため、枝管埋設工事が始まり、昭和63年より発掘調査が開始された。しかしながら、大半が道路部分の調査であるため、調査体制や、調査方法等に多くの課題が生まれている。このような状況の中で、下水道工事の円滑化を計り、また、埋蔵文化財の調査・保存を進めるため、東大阪市教育委員会、東大阪市下水道管理者および(財)東大阪市文化財協会の３者による協議が行われ、今後20年間におよぶ調査体制、および基本計画等が検討された。その結果、平成２年11月１日付けをもって、３者による基本協定が締結された。

この基本協定に基づき、平成２年度事業として若江遺跡第45次調査に着手することとなった。

第２章　調査概要

Ⅰ　若江遺跡

若江遺跡は、河内平野のほぼ中央、現在の東大阪市若江北町・若江本町・若江南町一帯にひろがる、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡は、楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地に位置し、現在の標高はＴ．Ｐ．＋4.5m前後を測り、田畑・工場・住宅の混在した市街地となっている。周辺には、近畿自動車道建設に伴う調査で大きな成果をあげている山賀遺跡・巨摩廃寺遺跡や、弥生時代の大規模な方形周溝墓が発見された瓜生堂遺跡などがある（図１）。

これまでの調査によって、若江遺跡では、室町時代から織豊期にかけての城郭遺構である若江城跡の堀や建物が検出され、先行する鎌倉時代頃の集落の様相も明らかになりつつある。また、遺構は確認されていないが、瓦が出土することから若江廃寺や若江郡衙の存在が推定されている。さらに下層では、弥生時代の水田や方形周溝墓が検出され、周辺遺跡との関連が注目されている。

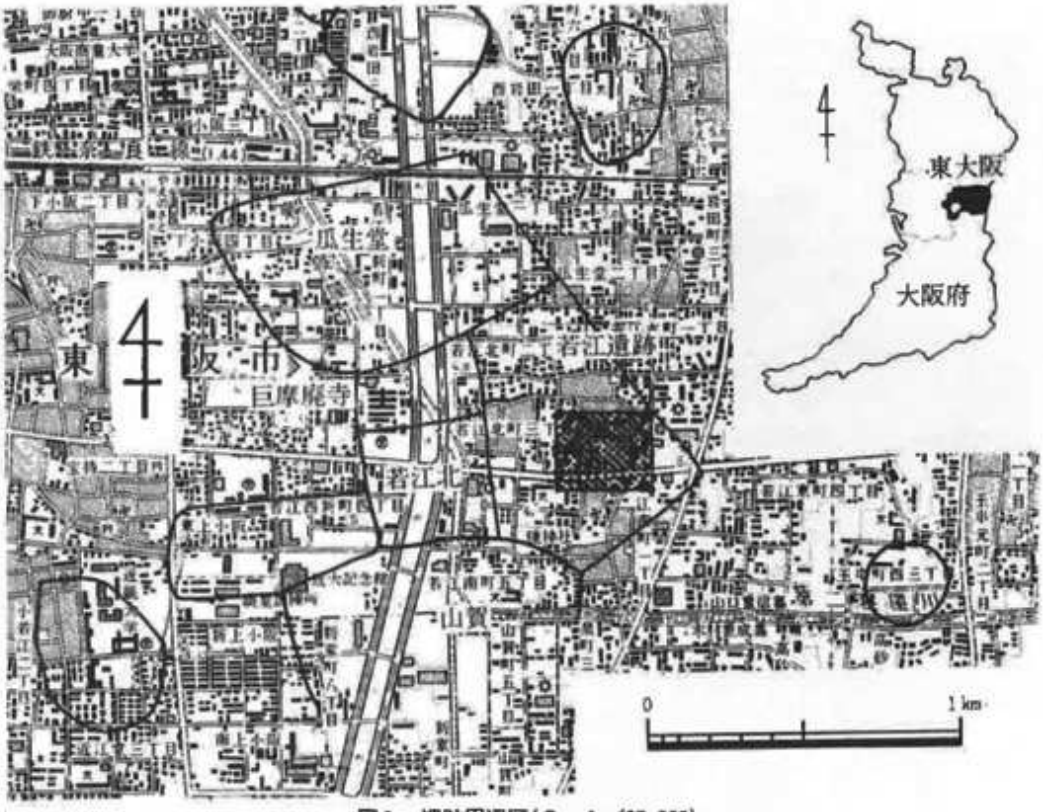


図１　遺跡周辺図（Ｓ＝１／25,000）

トーン部分は図２の範囲

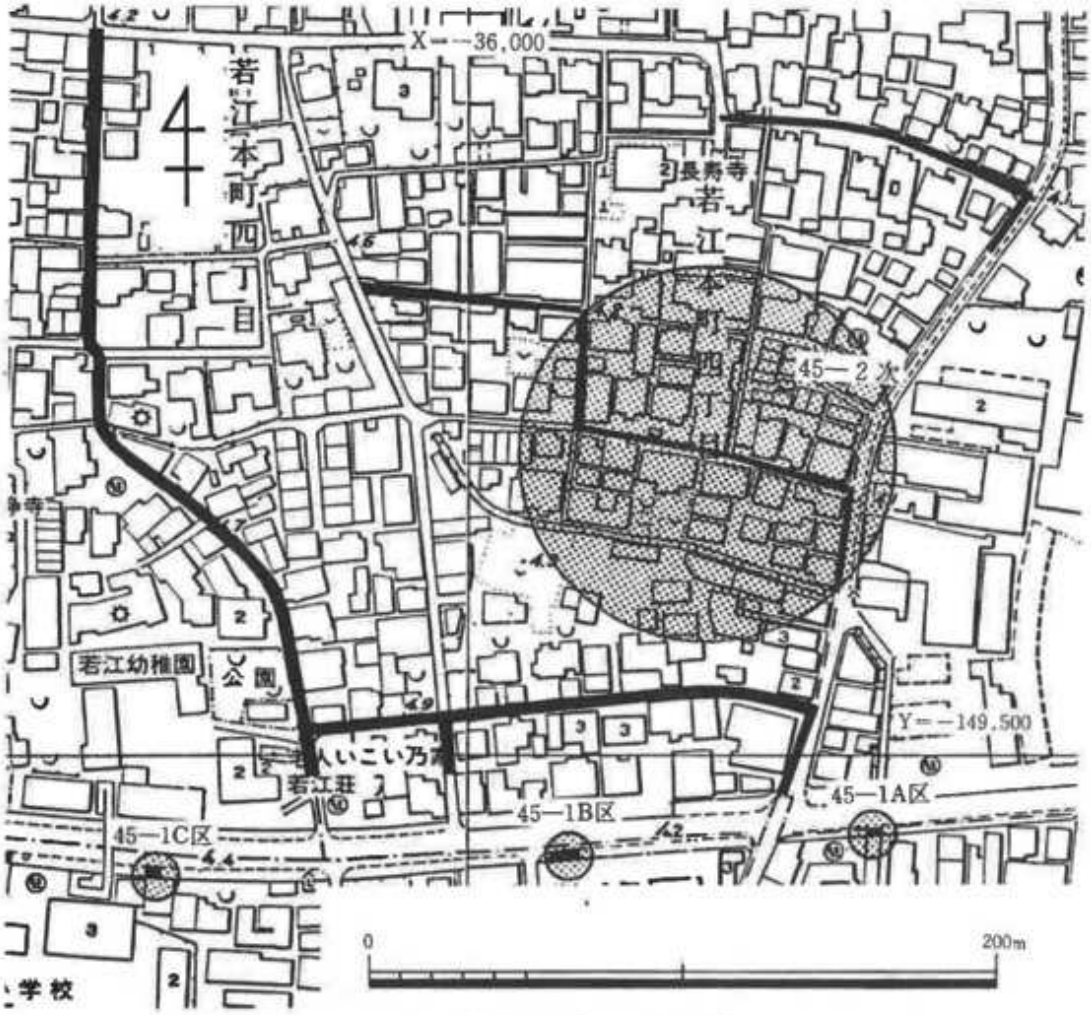


図2　調査区位置図(S＝1／2,500)

1．第45－1次発掘調査概要

- 調査地　東大阪市若江南町1・2丁目
- 調査面積　約46㎡
- 調査期間　1990年12月10日～1991年3月9日
- 調査担当者　金村浩一
- 築造工区名　第34工区

1)はじめに

調査地は、若江遺跡中央部を東西に横断する府道四条～長堂線(以下府道と呼ぶ)の歩道上に位置する。築造工法がシールドによる押し込み工法であるため、シールドの発進坑1個所、東西に約100m離れた2個所の到達坑について、現地表下約5mまで調査を実施した。3個所の

グリッドを東からA区、B区、C区と呼称するが、調査はB区(発進坑)から着手した。調査地が道路となっているため、夜間は覆鋼板をかぶせ、一部では調査中も覆鋼板をかぶせたまま行った。調査前には鋼矢板の打設、迂回路の確保など保全工事を行った。これらの工事や、年末年始の道路規制といった事情により、現場調査期間は下記のように断続的なものとなり、かつ長期間を要した。

A区　　1991年2月25日～3月9日(実働12日間)

B区　　1990年12月10日～12月21日(実働10日間)

C区　　1991年1月22日～2月9日(実働16日間)

整理作業は現場作業と並行して行い、現在も継続中である。いまだ十分に成果の検討を行ったとはいえないが、調査区ごとに概要を述べていくこととする。なお、ここでは遺構と出土した土器類のみ報告し、来年度に瓦類と木器類の報告をしたい。

2）調査の結果

・A区の調査(図3・6)

本調査区は若江城外堀とも想定されている、美女堂川にかかる形となった。周辺では以前に、送電線埋設に伴う第31次調査や府道拡張に伴う第33次調査、住宅建設に伴う第34－2次調査が行われている。美女堂川は現在、幅1mほどのコンクリートで護岸され、一部暗渠化された水路状となっている。本調査区は交差点の中央で、迂回路を確保できない地点にあり、期間短縮のため、土層確認を調査の主目的とした。また、掘削の大半は重機によった。

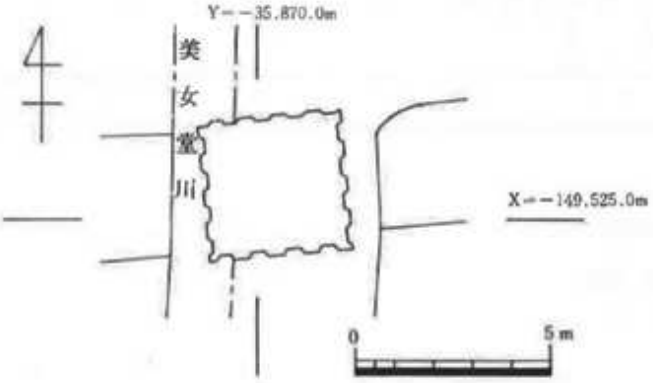


図3　A区位置図(S＝1／200)

層序の概略は上層から順に、以下の状態であり、遺構は検出できなかった。

第Ⅰ層　近年の盛土層

第Ⅱ層　現代遺物を含む水成層

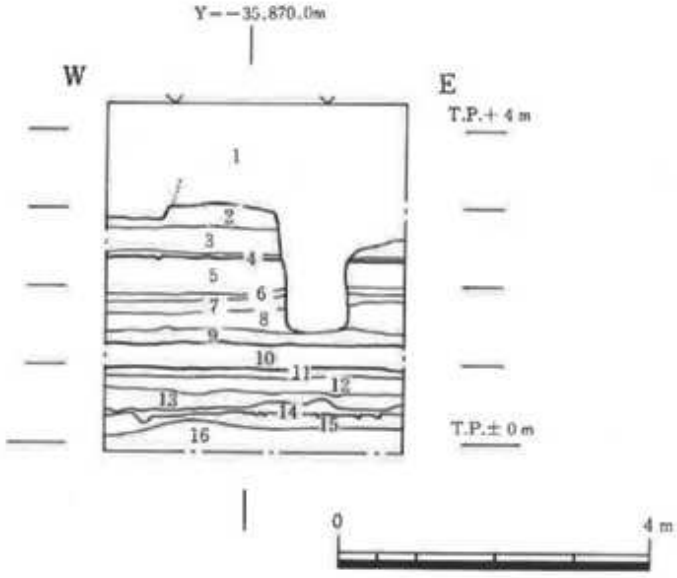
第Ⅲ層　無遺物の水成層

第Ⅳ層　無遺物の灰色砂礫層

第Ⅴ層　無遺物の砂礫，粘土層

Ⅱ層は、土管等を含み、現在のように護岸される以前の美女堂川内の堆積と考えられる。Ⅲ層は、Ⅱ層と同様の堆積状態が観察されたことからより以前の美女堂川内の堆積と考えられる。

遺物が出土しなかったため時期は明らかではない。Ⅳ層は植物遺体を多く含み、特にその下面に層をなして堆積していた。西端は厚く、東部ほど薄い。Ⅴ層は6層に細分されるが、少量の植物遺体のほかは遺物が出土しなかった。赤黒色砂混じり砂質シルト層の凸凹が注目されるものの、平面的な追求ができず、遺構と認識できなかった。



1 盛土(Ⅰ層)
2 5BG2/1 青黒色砂混細砂質シルト(Ⅱ層)
3 5B4/1 暗青黒色砂混細砂～粘質シルト(Ⅱ層)
4 5PB2/1 青黒色シルト質粘土(Ⅱ層)
5 5B4/1 暗青灰色細砂～シルト(Ⅲ層)
6 2.5Y4/1 黄灰色粘土(Ⅲ層)
7 7.5GY7/1 明緑灰色(Ⅲ層)
8 灰白色砂礫(Ⅲ層)
9 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色細砂混シルト質粘土(Ⅲ層)
10 灰白色砂礫(Ⅳ層)
11 7.5GY4/1 暗緑灰色細砂混シルト(Ⅴ層)
12 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～細砂(Ⅴ層)
13 5YR2/1 黒褐色細砂混シルト(Ⅴ層)
14 7.5YR2/1 赤黒色砂混砂質シルト(Ⅴ層)
15 10Y4/2 オリーブ灰色砂礫混砂質シルト(Ⅴ層)
16 10Y4/2 オリーブ灰色砂質シルト(Ⅴ層)

図4　A区北壁土層図(S＝1／100)

・B区の調査(図4・7・9)

本調査区は、第4次調査トレンチと一部重複していると思われるが、現在ではその正確な発掘区の位置が不明であり、今回の工事が以前の調査より深く及ぶため、調査を実施したものである。層序の概略は以下の状態であり、遺構はⅣ層下面で自然流路状の落ち込みを検出した。

第Ⅰ層　近年の盛土層
第Ⅱ層　現代遺物を含む攪乱層
第Ⅲ層　15世紀頃の遺物を含む粘土層
第Ⅳ層　古代の瓦から弥生中期土器を含む灰色砂礫層
第Ⅴ層　無遺物の砂礫，粘土層

Ⅲ層からは白磁・土師皿・土師羽釜・瓦質火舎などが出土した。皿や羽釜の形態から15世紀頃の堆積層と考えられる。Ⅳ層からは完形に近い弥生時代後期の甕2点の他、摩滅した中期の土器、古墳時代前半の土師器、トチの実などが出土した。布目のみられる丸平瓦も出土してい

るが、小破片であり、混入の可能性もある。ただし、破片点数は土器類以上に出土している。Ⅴ層は砂礫と緑灰色シルトの混合層と、黒色粘土層に分けられる。木の葉や枝などの植物遺体が出土したが、遺物は出土しなかった。なお上部の攪乱層から、13世紀頃の青磁や、古墳時代の、口頸部に波状文を施す須恵器甕が出土している。

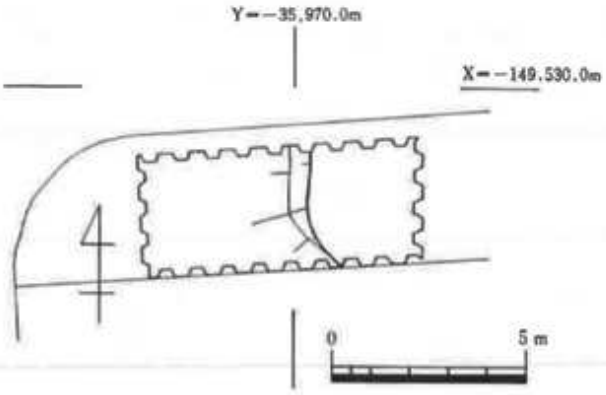
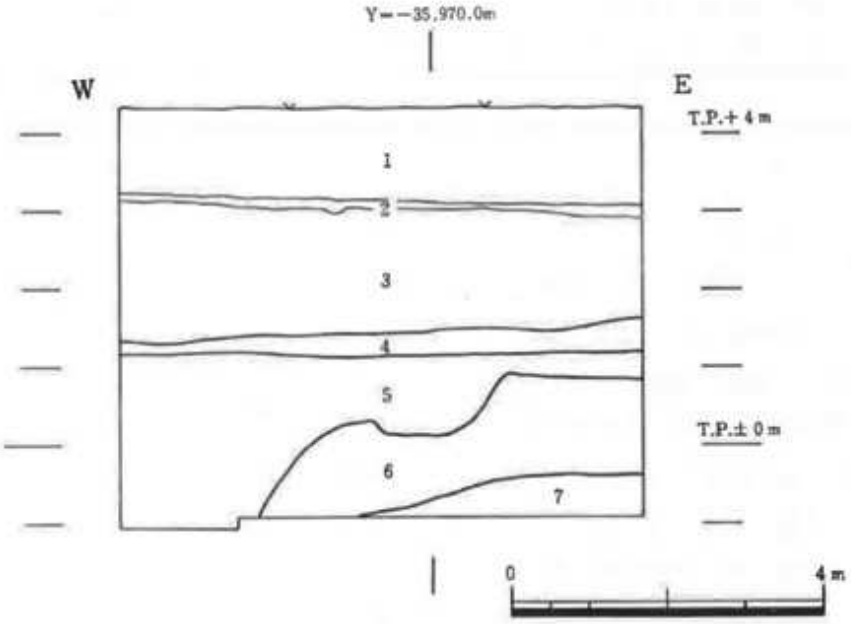


図5　B区Ⅳ層下面平面図(S＝1／200)

Ⅳ層下面で幅4m以上、深さ2m以上を測る、南北方向の落ち込みを検出した。調査の面積や深度の制約により全体の規模や形状は不明である。南東から北西に流れる自然流路の一部と考えられる。東岸以東のⅣ層は水平に堆積しており、この部分から弥生時代後期の甕が出土した。ほかにⅢ層下面に凸凹を検出したが、明確に遺構とは認識できなかった。



1　盛土(Ⅰ層)

2　10R8/1 赤灰色砂礫混粘質シルト(Ⅱ層)

3　2.5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト～粘土(Ⅱ層)

4　5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土(Ⅲ層)

5　5G5/1 緑灰色砂礫(Ⅳ層)

6　5G5/1 緑灰色細砂～砂質シルト(砂礫混合)(Ⅴ層)

7　黒色粘土(Ⅴ層)

図6　B区北壁土層図(S＝1／100)

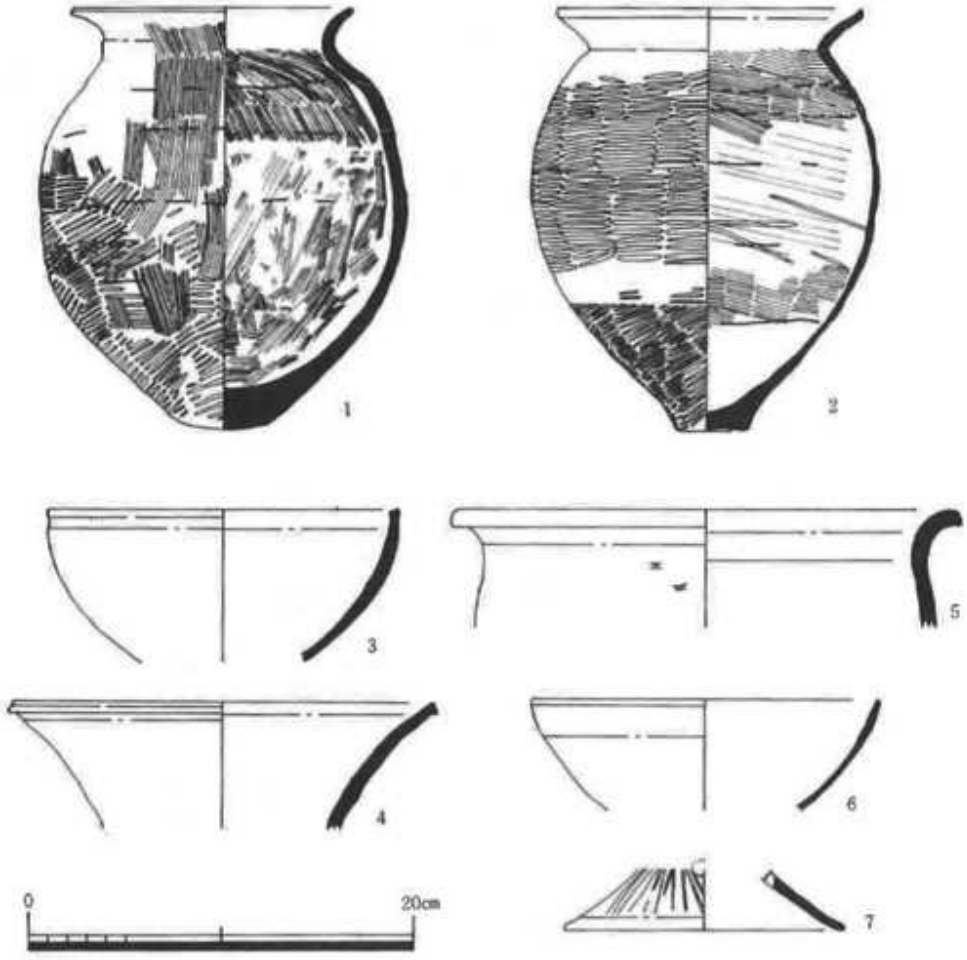


図7　B区Ⅳ層出土土器(S＝1／4)

・C区の調査(図5・8)

本調査区は府道拡張に伴う第14次調査トレンチと第20次調査トレンチの隙間を埋める形となった。両調査で若江城の堀が、また約10m南の若江小学校体育館建設に伴う調査(第38－2次調査)で、弥生時代の水田が検出されていることから、これらの遺構の広がりが把握出来るものと期待された。層序の概略は、上層から以下の状態であった。

第Ⅰ層　近年の盛土層

第Ⅱ層　主に13世紀の遺物を含む青灰色砂混粘土層

第Ⅲ層　弥生時代～16世紀頃の遺物を含む黒褐色細砂－砂混粘土層

第Ⅳ層　無遺物の黄灰色砂礫，粘土層

第Ⅴ層　土器を包含する砂礫，粘土層

Ⅱ層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器椀・土師皿・備前焼摺鉢・軒瓦などが出土した。

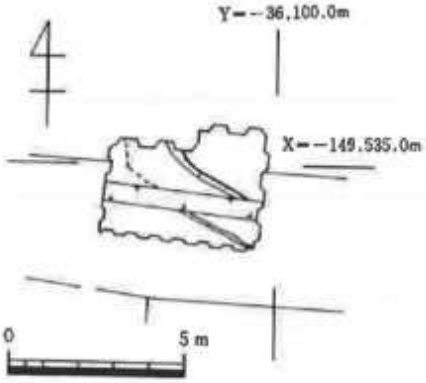
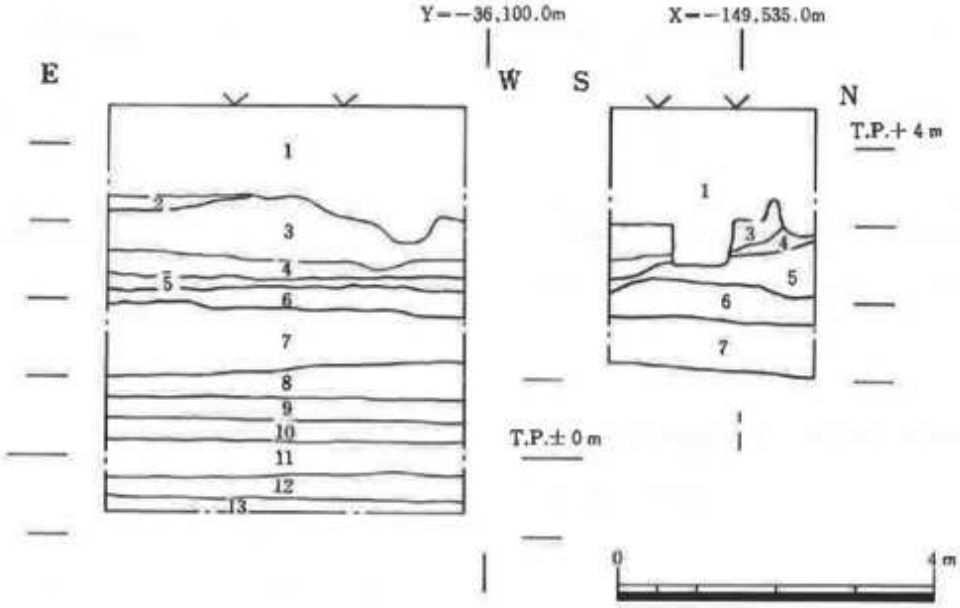


図8　C区Ⅲ層下面平面図(S＝1／200)

瓦器・土師皿がほとんどを占め、瓦器碗の高台がなくなり、器形が皿状となる時期のものがほとんどである。しかし、1点の土師皿と備前焼摺鉢は16世紀頃の特徴を持ち、本層の堆積時期はこのころと考えられる。Ⅲ層は、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器碗・常滑焼・瀬戸焼・備前焼・明染付・軒瓦・丸平瓦・漆椀・木製品などを大量に含んでいた。遺物種類の豊富さと同様に、時期も弥生時代から16世紀頃にかけてと幅がある。Ⅴ層は6層に細分される。上部の黒褐色粘土層には植物遺体が何枚も明瞭に層をなして堆積していた。T.P.±0m



1　盛土(Ⅰ層)
2　10YR4/1褐灰色砂礫混砂質シルト(Ⅱ層)
3　5BG4/1 暗青灰色砂混粘土(Ⅱ層)
4　10YR2/2 黒褐色細砂〜中粒砂(Ⅲ層)
5　10YR2/1 黒色砂混粘土(Ⅲ層)
6　2.5Y6/1 黄灰色中粒砂〜粗砂(Ⅳ層)
7　2.5Y4/1 黄灰色粘土(Ⅳ層)
8　5Y4/1 灰色砂礫(Ⅳ層)
9　7.5YR2/2 黒褐色細砂質シルト(Ⅴ層)
10　7.5YR3/2 暗褐色細砂質シルト(Ⅴ層)
11　7.5YR2/3 極暗褐色砂混粘土(Ⅴ層)
12　黒色粘土と砂礫の混合(Ⅴ層)
13　5BG5/1 青灰色粘土(Ⅴ層)

図9　C区土層図(S＝1／100)

付近の青灰色砂質シルト～粘土層には、水平な黒色の縞が多数観察され、弥生中期土器底部と古墳時代土師器の印象を持つ壺の体部が出土した。

Ⅲ層を除去した段階で、北東から南西に低くなる傾斜面を検出した。これまでの調査成果から、この傾斜面は若江城の堀の一部と考えられる。出土遺物から、Ⅱ層・Ⅲ層は同時期に堆積したと思われ、粘土ブロックや礫が混合している状態から、人為的な堆積によるものと考えられた。したがって、層の違いは、時期的な差によるものではなく、堀を一度に埋める時、上部を中世遺物包含層によって埋めているという、土質の違いによるものである。

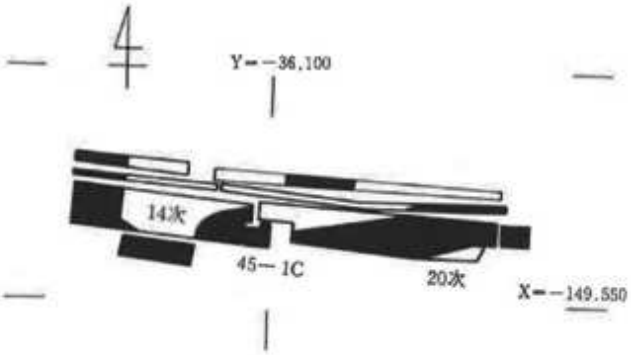


図10　検出遺構(堀)模式図

Ⅲ層以下各層ごとに精査したものの、遺構は確認できず、水田畦畔は検出できなかった。

3）まとめ

中世から近世にかけての若江遺跡は、これまでの府道拡張に伴う調査等によって明らかになりつつある。しかし、より深部に埋もれている、弥生から古墳時代にかけての状況については不明な点が多い。

今回の調査では、現地表下約５ｍまでを調査することによって、若江遺跡中央部での堆積状況についての資料を得ることができた。小面積のために面的な広がりをつかむには至らなかったが、周辺部の資料とともに検討することによって、当時の環境などが明らかにされよう。

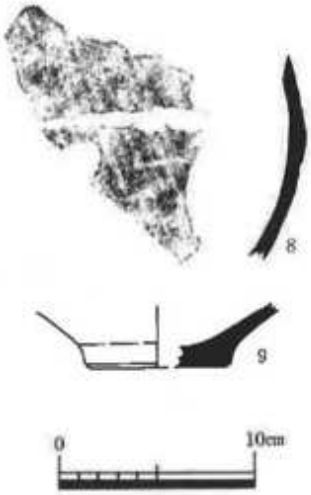


図11　C区Ⅴ層出土土器(S＝1／4)

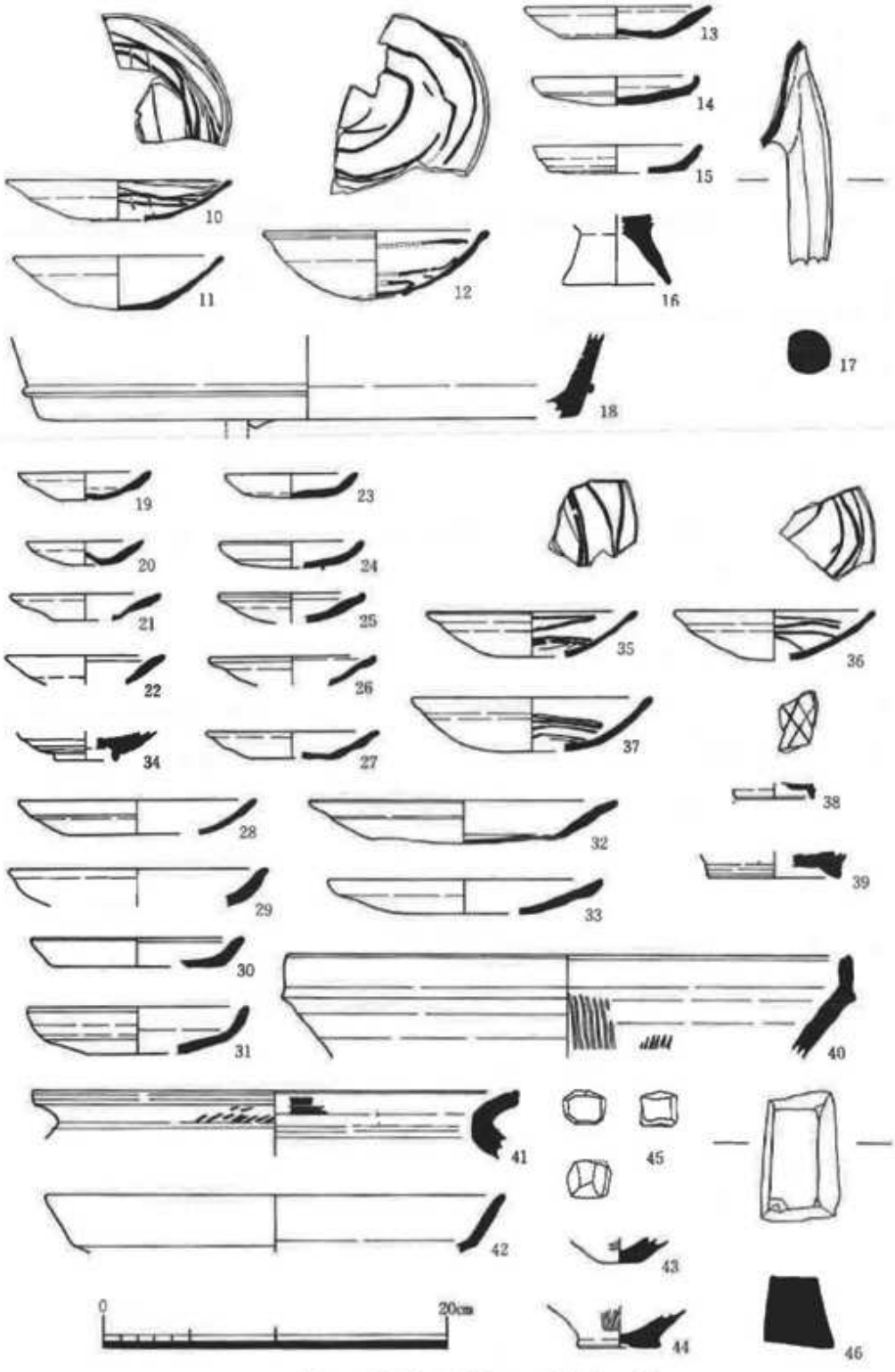


図12　C区堀出土遺物(Ⅱ・Ⅲ層)(S=1/4)

図	番号	種類・器種	径×器高	図化	色調(外面)	備　　考
7	1	弥生・甕	15.5×21.9	合成	淡黄色	外面下部たたき、煤付着
	2	弥生・甕	15.5×21.9	完形	にぶい橙色	外面たたき調整、煤付着
	3	弥生・鉢	18.0×　・	反転	暗赤褐色	調整不明
	4	弥生・壺	21.6×　・	反転	灰色	調整不明
	5	弥生・甕	25.0×　・	反転	黒褐色	摩耗、角閃石含、煤付着
	6	土師器・鉢	17.8×　・	反転	灰黄褐色	外面不調整、ひびわれ有
	7	土師器・高杯？	・　×　・	反転	にぶい黄橙	外面暗文
12	8	弥生土器・甕	・　×　・		灰黄褐色	外面はけ調整
	9	弥生土器・甕？	・　×　・	完形	褐灰色	摩耗、角閃石含
13	10	瓦器・碗	13.4× 2.4	反転	銀黒色	外面指頭痕有、口縁部なで
	11	瓦器・碗	12.0× 3.1	合成	暗灰色	外面指頭痕有、口縁部なで
	12	瓦器・碗	12.8× 3.9	反転	暗灰色	外面指頭痕有、口縁部なで
	13	土師・小皿	10.5× 1.9	反転	灰白色	焼成硬質(ぱりぱり)
	14	土師・小皿	9.4× 1.6	反転	にぶい黄色	焼成軟質、胎土粗
	15	土師・小皿	9.6× 1.6	反転	にぶい橙色	焼成硬質
	16	弥生・台付甕	・　×　・	合成	淡黄色	摩耗、てずくね土器？
	17	瓦質・鼎(脚部)	・　×　・		暗灰色	残存長13.0cm
	18	瓦質・火舎	・　×　・	反転	暗灰色	底部外面砂目、底径31.4cm
	19	土師・小皿	7.4× 1.7	完形	灰白色	焼成やや硬質
	20	土師・小皿	6.7× 1.4	完形	灰白色	煤付着
	21	土師・小皿	8.6× 1.6	反転	にぶい黄色	
	22	土師・小皿	9.0×　・	反転	灰白色	
	23	土師・小皿	7.5× 1.4	反転	灰色	焼成やや軟質
	24	土師・小皿	8.0× 1.6	反転	灰黄褐色	焼成やや軟質
	25	土師・小皿	9.4×　・	反転	灰黄褐色	焼成やや軟質
	26	土師・小皿	8.4×　・	反転	灰白色	焼成やや軟質

表1　出土遺物一覧表1

＊　・は計測不可。

＊　完形は図化部分が遺存するもの、合成は一部を反転復原し、図化したもの。

図	番号	種類・器種	口径×器高	図化	色調(外面)	備　　考
13	27	土師・小皿	9.8× 1.6	反転	灰白色	焼成硬質(ぱりぱり)
	28	土師・中皿	13.6× 2.0	反転	灰黄褐色	焼成やや軟質
	29	土師・中皿	14.8× ・	反転	灰褐色	焼成やや軟質
	30	土師・中皿	12.0× 1.7	反転	にぶい黄橙	焼成硬質
	31	土師・中皿	12.6× 2.8	反転	浅黄橙色	焼成硬質
	32	土師・大皿	17.5× 2.5	反転	灰白色	焼成硬質(ぱりぱり)
	33	土師・大皿	15.6× 1.4	反転	灰白色	焼成やや軟質
	34	明染付・碗(底)	・ × ・	反転	灰色より白	底部内面に不明の文様有
	35	瓦器・碗	12.0× ・	反転	灰白色	外面指頭痕有、口縁部なで
	36	瓦器・碗	11.2× 2.9	反転	灰白色	外面指頭痕有、口縁部なで
	37	瓦器・碗	13.6× 3.2	反転	灰白色	外面指頭痕有、口縁部なで
	38	瓦器・碗	・ × ・	反転	灰白色	胎土粗、少片、底径不安
	39	瓦器・碗?	・ × ・	反転	浅黄色	内面に緑～灰白色の釉有
	40	備前・摺鉢	32.4× ・	反転	赤褐色	少片のため口径不安
	41	須恵器・甕	27.8× ・	反転	暗青灰色	東播系、口径は頸から算出
	42	弥生・壺	26.4× ・	反転	灰黄褐色	少片のため口径不安
	43	弥生・甕?	・ × ・	完形	にぶい橙色	外面たたき調整
	44	弥生・甕?	・ × ・	完形	にぶい黄色	外面けずり調整
	45	瓦製円盤	2.2× 2.0	完形	橙色	胎土精良、布目を残す
	46	砥石	・ × 4.5		暗灰色	緑泥片岩

表2　出土遺物一覧表2

＊　10～18はⅡ層出土、19～46はⅢ層出土。

2．第45－2次発掘調査概要

・調査地　　東大阪市若江本町4丁目
・調査面積　　約160㎡(予定)
・調査期間　　1991年3月4日～継続中
・調査担当者　井上伸一
・築造工区名　第39工区

1）はじめに

今回で45次を数える若江遺跡の発掘調査によって、従来より"幻の城"と言われてきた若江城が、現在の若江幼稚園付近を中心地としていたことがほぼ確認されている。しかしその調査の多くは、若江幼稚園よりも南部、つまり若江城中心地以南の地域に集中していたのである。

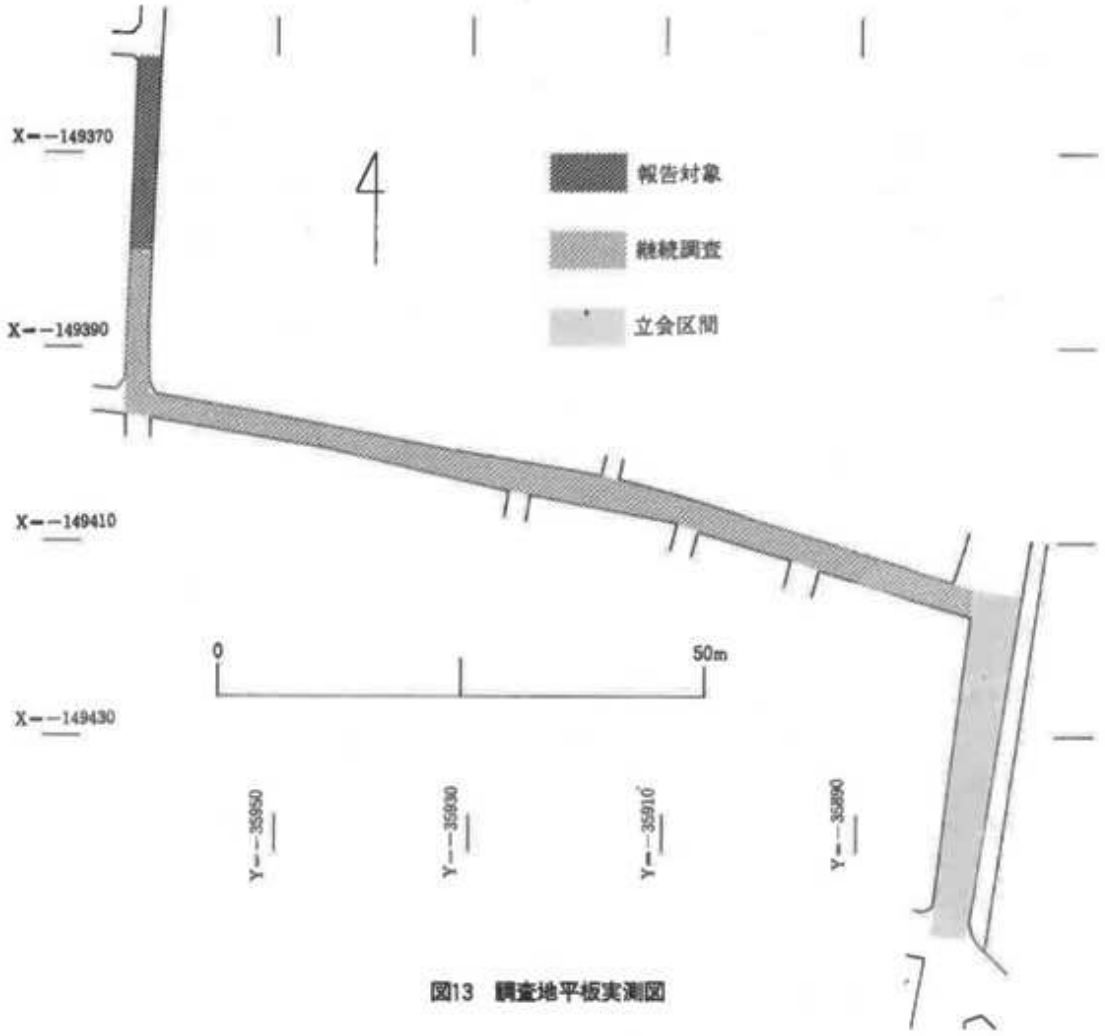


図13　調査地平板実測図

ところが近年、東大阪市より委託を受けた公共下水道管渠築造工事に伴う第39次、第43次、第44次、第45－２次調査は、これまであまり調査の及んでいない若江城中心地から北東の地域を対象とし、城郭関連遺構の広がり、延いては若江遺跡の全貌を明らかにしつつある。

第45－２次調査は、若江本町４丁目地内の第43次調査西トレンチ東端を起点とし、トレンチの幅１ｍ強で南へ37ｍ、さらに木村通りに至るまでの東へ91.5ｍ、計128.5ｍを本調査区間とし、木村通りの32.5ｍを立会区間とする。調査は平成３年３月４日に開始し、３月末日現在調査を終了している起点から20ｍが、ここでの報告対象となる。

２）基本層序

報告対象地区の半ばは、若江城をめぐる堀によって占められる。従ってここでは、堀北肩より北部にみられる８層からなる層序を基本的なものとし、以下の特徴を挙げることができる。

第１層　地表下約70cmまでを下水管、約140cmまでを水道管敷設によって撹乱されている。山土、第２層を再び埋め戻した現代層。

第２層　暗褐色(10ＹＲ3/3)細粒砂混りのシルト～粘土。粗粒砂～細礫を多量、中礫を微量含む。堀埋土最上層の直上にもみられる。土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦が出土。

第３層　黄褐色(2.5Ｙ5/3)細粒砂～中粒砂。

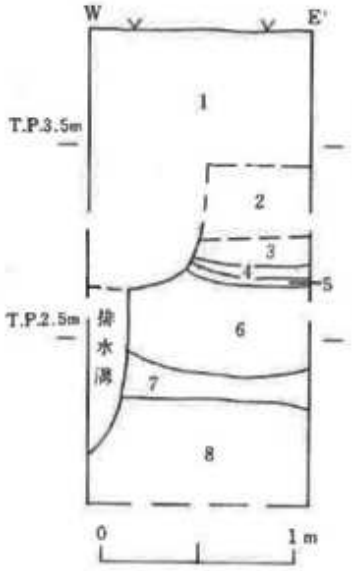


図14　基本層序

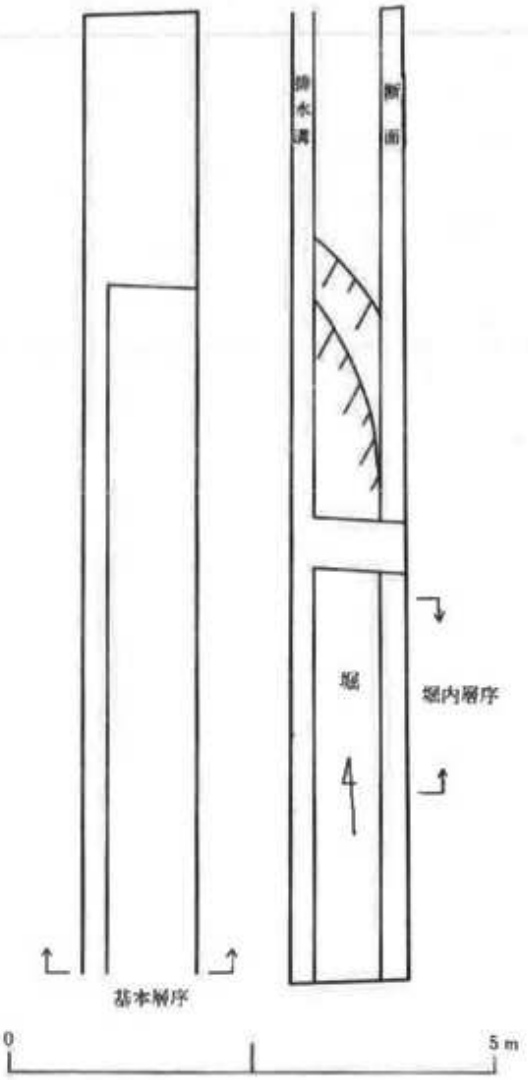


図15　遺構平面図

第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂混りの粘土。堀検出面。

第５層　にぶい黄褐色(10Y R4/3)細礫混りの細粒砂～中粒砂。弥生時代後期～庄内期にかけての壺、甕、鉢および土師器高杯が出土。

第６層　にぶい黄橙色(10Y R6/4)細礫混りの粗粒砂～極粗粒砂。第７層との境界に鉄分の沈着層がみられる。

第７層　灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒砂～シルト。植物遺体を含む。

第８層　灰色(10Y4/1)粘土。上部約10cmまでは第７層の極細粒砂が混る。植物遺体を含む。

３）遺構

第４層上面で検出した堀は、調査地の幅が狭いため断定できないが、およそ北北西～南南東へ延びると思われるものの北肩で、南肩は現在のところ確認していない。遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、弥生土器、瓦、獣骨が出土している。部分的であるが堀内の層序はA～Fの６層からなり、堀底は確認できなかったが、F層の下には暗オリーブ灰色(5G Y4/1)粗粒砂～極粗粒砂の無遺物層がみられ、F層が堀底の堆積層と思われ、堀の深さは80cm以上になる。各層の特徴は次の通りである。

A層　オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂混りのシルト～粘土。粗粒砂～極粗粒砂を多量、細礫を微量含む。第２層との境界に鉄分の沈着層がみられる。

B層　暗緑灰色(10G3/1)シルト。細礫を少量含む。

C層　暗紫灰色(5R P3/1)細粒砂～中粒砂。

D層　暗緑灰色(7.5G Y3/1)中粒砂～粗粒砂。極細粒砂のブロックが混る。

E層　黒色(N2/)細粒砂。極粗粒砂、粘土ブロックが混る。

F層　緑黒色(5G 1.7/1)粘土。

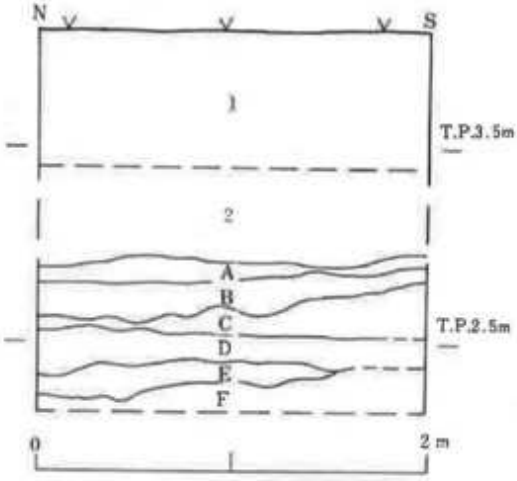


図16　堀内層序

４）出土遺物

土師器皿(１～２)、青磁碗(６)、瓦質擂鉢(８)は第２層から出土している。(６)は蓮弁をもつが鎬や間弁はなく、明緑灰色(10G Y8/1)を呈する。口縁端部は丸味をもち、内面の釉が厚いためにわずかに肥厚する。(８)は体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部上端は面をもつ。端部は回転を利用したヨコナデで内側へつまみ出し、尖り気味である。体部内面には幅２cm、７本からなる櫛状工具で下から上へ擂目をつける。片口部がわずかに残存する。焼成があまりよくなく、炭素の吸着が不十分で、灰白色(2.5Y8/2)を呈する。

土師器皿(３～５)、東播系こね鉢(７)は堀から出土している。(４)はA層出土で、灯明皿として使用したと思われる煤の付着がみられる。口縁部はヨコナデ、体部はユビオサエの後にナ

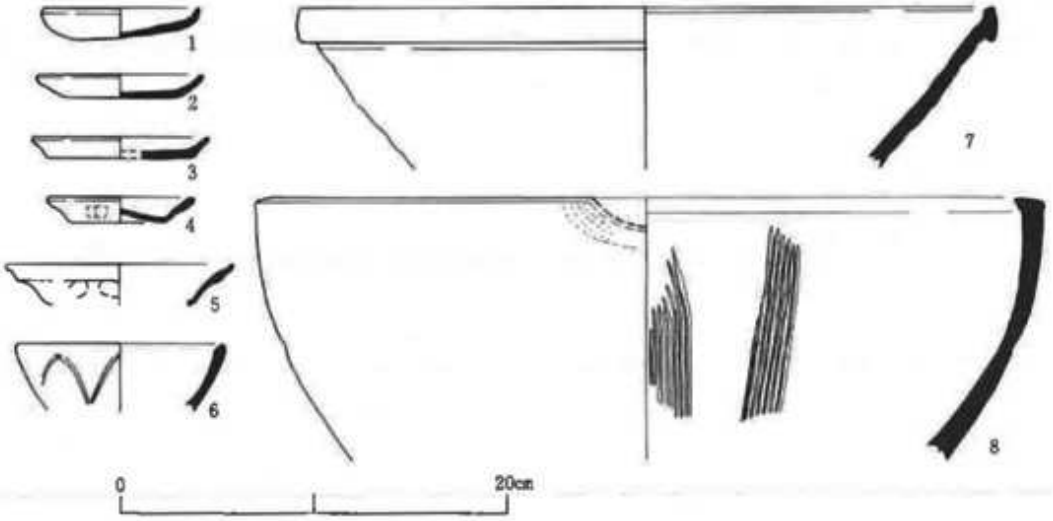


図17　出土遺物実測図

デを施す。見込みと体部の境はヨコナデにより溝状に凹む。外底面はユビオサエにより凹み、いわゆるヘソ皿である。(5)はF層出土で、体部は外反しながらラッパ状に大きく開き、口縁端部は尖り気味である。外面体部下半はユビオサエによる指頭圧痕が明瞭である。

平成2年度末より開始した第45－2次調査は、現在も現場調査、整理作業を継続中であり、ここでは現況の概略を報告するに止め、詳細は後日に譲りたい。

図版1　若江45－1次

若江遺跡
45－1次A区
調査地近景

45－1次A区
北壁土層

45－1次B区
Ⅳ層下面
落ち込み

図版2　若江45－1次

若江遺跡
45－1次B区
東壁(中部)

45－1次B区
Ⅳ層土器
出土状況

45－1次B区
東壁(下部)

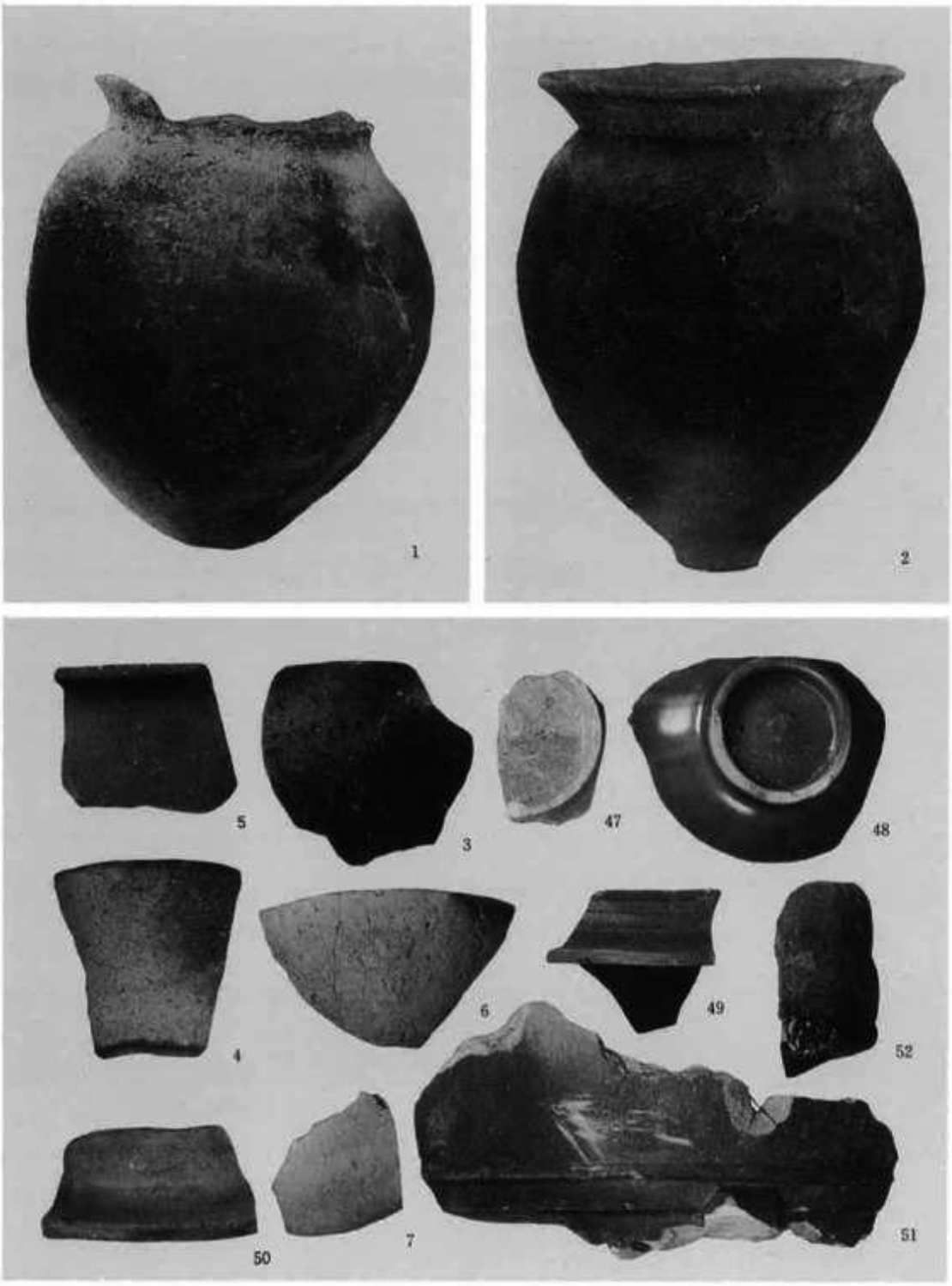
図版3　若江45－1次

若江遺跡
45－1次C区
Ⅲ層下面
堀

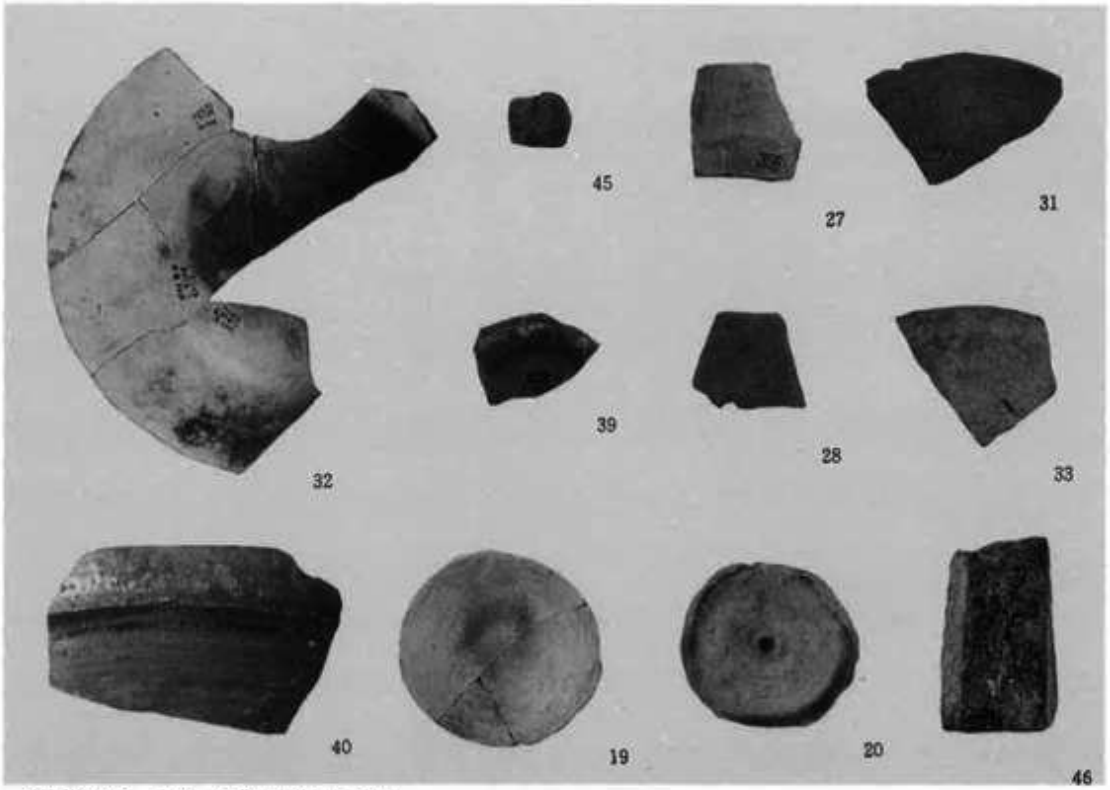
45－1次C区
南壁(上部)

45－1次C区
西壁(下部)

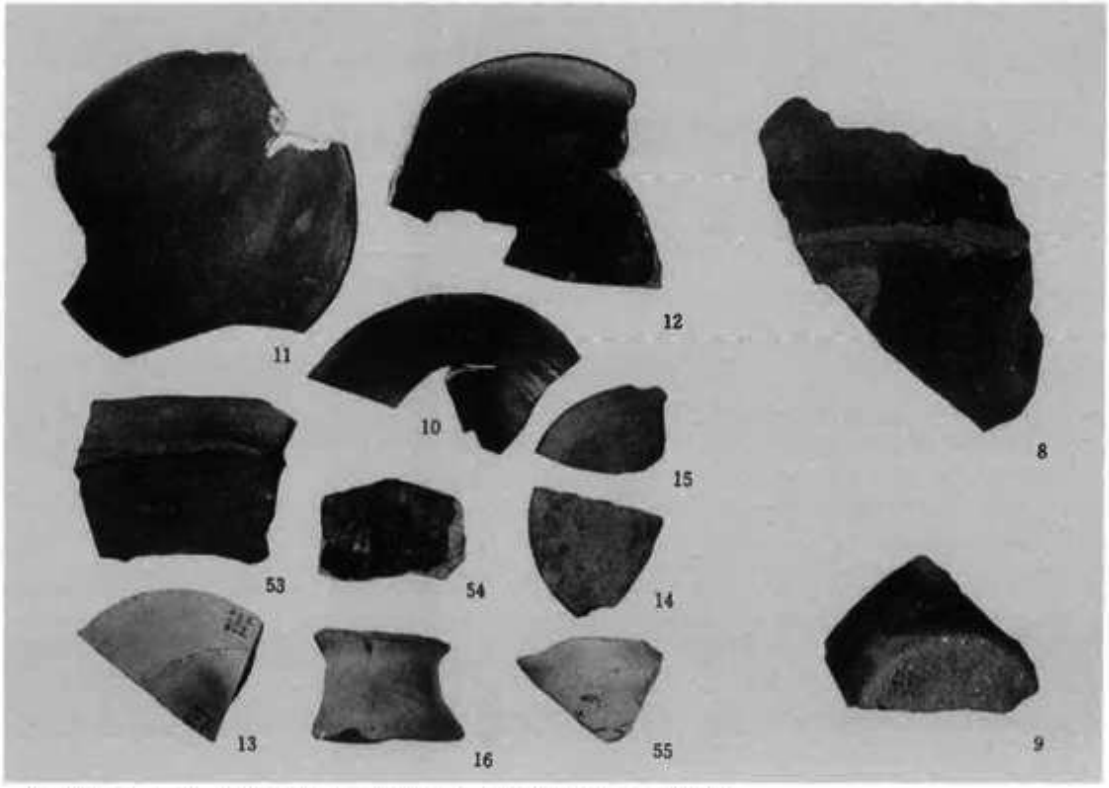
図版4　若江45－1次



若江遺跡45－1次　B区Ⅳ層出土土器（1～7）
B区Ⅱ層出土土器（47：白磁、48：青磁、49：瓦質羽釜
50：土師羽釜、51：瓦質火入、52：羽口）



若江遺跡45－1次　C区Ⅲ層出土土器



若江遺跡45－1次　C区Ⅱ層出土土器(10～16、53：備前擂鉢、54：瓦器
55：土師器)
C区Ⅴ層出土土器(8～9)

図版6　若江45－2次

若江遺跡
45－2次
基本層序

45－2次
堀

45－2次
遺物出土状況

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告Ⅰ
－１９９０年度－

1991年　３月31日
発行　(財)東大阪市文化財協会
東大阪市荒川３－28－21
TEL　06－736－0346
印刷　(株)近畿印刷センター